

Title	キリスト教世界の成立について
Sub Title	Carolingian system as Christendom
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1968
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.3 (1968. 12) ,p.1(339)- 40(378)
JaLC DOI	
Abstract	Although Charlemagne convinced it his duty to protect the religious as well as the political welfare of his subjects, he did what Byzantine emperors had done for the East. And no clear division could be realized between the secular and the spiritual spheres of life and of authority in the Carolingian system, as in Byzantium. Moreover, in the rate of christianization, the West was judged "but skin-deep and therefore the famous peace of the empire was nothing more than a temporary lull in the armed combat." But we must keep in mind this "temporary lull" which has been so-called ecclesiastical. There had been found scarcely other people around Charlemagne but some bishops, abbots, priests, monks or clergymen. Nevertheless, the crisis of Carolingian Empire seems to be perceived in the fact that most of them would not have been called strictly religious, however political to the last, and too much secular, but barely spiritual, including the Emperor himself.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19681200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

キリスト教世界の成立について

近 山 金 次

いわゆる「キリスト教世界」(christendom)は近代語であるとしても、異教徒の世界に拮抗するキリスト教徒と言う立場は十字軍運動の渦巻く中世後期には既に確立するものと見てよい。然らばわれわれはキリスト教的にまとまりを見せる歴史的世界の成立を如何なる時期に想定出来るのであるか。古代ローマ帝国がキリスト教帝国として崩壊したとしてもそれにつづくゲルマン諸部族の社会がそのままキリスト教的なものとは言い難い。西ローマ崩壊後二〇年、フランク人の王クロヴィスがカトリックに改宗してゲルマン諸族のキリスト教化に一つの道が開かれるが、当分の間はグレゴリウス司教のフランク史に見られる様な殺伐な気風が社会を風靡しているし、異教の残存勢力も侮り難い。教会史では由緒も分らぬ様な無数の聖人を物語る時代であるが、これまで都市生活に依拠していた教会生活は社会の混乱に押し流されてしまふ。教会の動きも地方によつてまちまちであり、教皇のとり残されたローマと東方勢力の存続するラヴェンナの間にすら確執が珍しくない。ローマ帝国の崩壊と言うことは古典文化を支えていた基盤の崩壊でもあり、その後に残されたものと言えはその精神を伝えるラテン語が学問を忘れられない人々によつて読まれ、語られ、写され、書かれているぐらいなものであつた。こうして古代の文化遺産は教会や修院に設けられた学校で承け継がれて行くことになつたから、文化の価値を正当に評価するほどの人ならば必ず教会や修院に何等かの関係をもたねばならなかつた。この様な事情は、教会や修院の側から見れば甚だ迷惑なことも生むのであつて、時には教会や修院の目的とする本来の宗教性が傷つけられる様な結果

も避けられないのである。どうあつても宗教的とは言えない事柄にまで教皇や教会や修院が引き合いに出され、その動きを度外視してはその時代の歴史が理解しにくい様なことが余りにも多いのは事実である。しかし、その様なことはキリスト教が混乱時代を通じて一般社会に浸透し、その社会の無視出来ない要素となつて歴史の舞台に登場すれば、必ず見られなければならない現象であつたとも言える。混沌としたその世界にやがて秩序がよみがえつて、これまでとはちがう新しいまとまりをもち始めるのに各地のキリスト教会が、とりわけイタリアのローマ教皇が大きな役割を演じたのは事実である。だからと言つて、教皇や教会が中心になつて政治、経済、文化のすべてを動かしたと言ふ意味ではないし、それにもましてキリスト教的理想の世界がそこに実現したとか、また実現されそうになつたとか言ふ意味でもない。確かにその社会では教皇や教会がすべてのことで何かと問題にされたことは事実であるが、それは人々に話し合いの共通の場を提供していたからのもので、人々がキリスト教精神に充ち溢れて行動していたからではない。従つて各地のキリスト教会や修院が中心になつて秩序の回復運動を盛り上げて行つたと言ふ様に見ることは出来ない。事實はもつと生々しい葛藤を綴る。いづれにせよローマ教皇領 (*Respublica Romanorum*) も成立し、キリスト教帝国 (*Imperium Christianum*) と呼ばれるものが一応出来上れば、たとえそれが忽ち崩れ去つたにしても、そこにキリスト教世界の成立を云々し得るであらう。

七三二年に於けるポアティエの戦役はフランス史では勿論、西洋史上で劃期的なものと言われる。これがキリスト教世界としてのヨーロッパの成立につらなるものとさえ見ようとするものもある。果してその通りなのであろうか。ガリアがスペインの如く回教圏にならないことが決つたこの日に、フランク軍が守つたのは確かにヨーロッパであつた。結果から見れば確かにそうなのであるが、当時の勇士等がその様な意識をもつていたか何うかは別問題であり、まして勇士等の行動がその時点に於てキリスト教的なものとなつただけ結びつき得たか、キリスト教世界としてのヨーロッパをそのまま問題

と出来るのか何うかもまた大いに疑問の余地を残している。少くとも当時のキリスト教関係の史料がこの事件に対して殆ど無感動であることは否定し得ぬ事実である。イギリス中世史のヘロドトスと言われるベードはこの事件のあつた前年に *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* を撰筆している。情報蒐集に熱心な彼がその活動的な生涯を終える七三五年までこの事件について全く何も聞いていないなどは想像出来ぬことであるのに、ただの一言もこれについては書き残していない。当時、ローマ聖庁はイギリス出身の聖ボニファキウスのライン流域に於ける活潑な布教活動に支持をおしまず、七三二年にはゲルマニア大司教としてのパリウムを与えたりしているが、フランク教会の問題については七四一年にカロルス・マルテルスが他界するまで一切の積極的行動をさしひかえている。フランク王国に於けるカロリング朝の発生と関係がないわけではないこの事件について、当時の史家がこの事件の意義をもつと誇大にかかげてもよさそうなものであるのに、僅か三名の史家がこれを遠慮がちに伝えているだけで、当時の史家にはこの事件の意義を正しく後世に伝える才能すらなかつたのだと酷評する人もある。

問題の史家とは、第一が *Fredegarius* (七世紀半のブルグンド人で、グレゴリウス司教のフランク史の後をついで記述した史家) の *Chronica* の続編 *Continuationes* (MG. SS. rer. Mer. II, pp. 168-193) である。第二はロンバルド出身の優れたキリスト教史家で、「イタリア史の父」と呼ばれる *Paulus Levita* 即ち *Warnefridi* (C. 720~C. 800) で、この人は教養ある貴族としてフランク王国に迎えられ、*Gesta Episcoporum Mettensium* などを書き残しているが、モンテ・カシノにもどつてから記した *Historia Gentis Langobardorum* (568~744) の中にも記事 (VI, 54—PL. XCV col. 659~660) が参照される。第三はポルトガルの南にあるベジヤのイスドルス司教の記事 (*Isidori Pacensis Chronicon*, 59~60—PL. XCVI, col. 1271-21) である。前二者はともに *saraceni* と闘う *Franci* を描くが、その記事は南仏を中心述べられていて、別にキリスト教世界の連帯感乃至危機感などは伝えていない。第三のもののみが *saraceni*, *Ara-*

bes, agmen Ismaelitarum と闘へ Franci, gens Austriae, Europenses の姿を多少詳細に記述し、Christiani の表現もあり、危機の意識もないわけではないが、この頃の一般の人々には差し迫る共通の危機を痛感するだけの全体の見通しはなかつた様である。そのことは幾つかの年代記を見ても顕著である。「カロルス」 saraceni と闘ふ」と記す Annales Tiliani と Annales Laubacenses と対し、Annales Sancti Amandi は「十月」と言ふ句、Annales Petaviani は「十月の土曜日」と言ふ句を加えているだけである (MG. SS. I, pp. 8-9)。Annales Lareshamenses, Annales Alamannici, Annales Nazariani もそれと「サラーマニヤ」と言ふ句を付加するのみ (MG. SS. I, pp. 24-25)。Annales Sangallenses breves, Annales Augienses など至つては全くこの事件を無視して七三四年のフリジア討伐を記録してゐる (MG. SS. I, pp. 64, 67)。それと Annales Sangallenses Maiores では「カロルス」ポアティエと土曜日に Saraceni と闘ふ」と記してゐる (MG. SS. I, p. 73)。Annales Salisburgenses は東方皇帝の継承やシャーハマンの生誕を記録してもポアティエの戦役については一言も触れてゐない (MG. SS. I, p. 89)。それと同く Annales Sanctae Columbae Senonensis と同じく Annales Mauriacenses (MG. SS. I, p. 102)。Annales Laurissenses Minores はカロルスの他の戦果を記述してもこの事件については目を閉じてゐる (MG. SS. I, p. 115)。Chronicon Moissiacense はカロルスの活躍を手際よくまとめて記述しているが、それ以上には出ない (MG. SS. I, p. 291)。Annales Mettenses はキリスト教徒同士の裏切りを伝えている (MG. SS. I, p. 325)。Annales Fuldensis はカロルスの南下を強調するの余り、ポアティエの戦役を無視するが如き態度である (MG. SS. I, p. 344)。Reginonis Chronicon (MG. SS. I, p. 553) によれば、この時 Saraceni の死者三万五千に対し、Franci の死者千五百と言ふ数字をアクイタニア公エウドの教皇宛書簡に基いて上げているが、この記事は全く同じ形で Liber Pontificalis I, p. 401—Gregorius II, 11 にも見ることが出来る。法外な数字を伝えているだけで、却つて事件の重要性を軽視している様な節がないでもない。要するにこれらの

年代記者たちはポアティエの戦役を重視するよりか、その頃の南仏の情勢にもつと深い関心をよせているのである。

八世紀初頭にセウタを占領したアラブ人をスペインに渡したのは東方帝国に所属する艦隊であるから、キリスト教世界の連帯感などと言うものは東方帝国に関する限り既に問題とならない。七一年ジブラルタル海峡を渡り、三年後には北部を除くスペイン全部を圧えたアラブ人は七一四―七七年に南仏に入り、七二〇年にはナルボンヌをとった。翌年からは更に活躍の舞台をひろげ、七二五年にはカルカソンヌをとり、オタンを掠奪している。七三二年ボルドーを抜いたアラブ軍はカロルス・マルテルスの部隊に遭遇するまで、ポアティエのバシリカを焼き、ツール目指して進撃をつづけていた。秋十月ポアティエの北北東スノン (Vienne と Clain の交流点) で七日間、対峙してから土曜日に交戦し、「氷の様に固い帯」(zona rigoris glacialiter) のフランク密集陣は最後の勝利を得た。敵将アブデルラーマンは殺され、残余は仲間のもとへ引き上げた、と言うのが記録の物語る要点である。

曾てフン人がローマ世界に侵入した五世紀半にはまだ帝国の体制が残存して居り、ガリアを救った將軍アエティウスも現れ、少くともそこにはキリスト教会の結束した動きが見られ、メス司教アウクトルやオルレアン司教アニヌスやトロア司教ルプスやパリの聖女ジュヌヴィエーヴがそれぞれ伝説の人となるのであり、ローマ教皇レオ一世も確かに一役演じているのであるが、それから約三百年後の八世紀半に於ける回教徒の進撃に際しては、最早ローマ帝国はなく、地方勢力の動向はまちまちであり、同じ様なキリスト教社会の結束を期待すべくもない。事実その様な動きは何一つ存在しなかった。さればインゲルハイム宮殿の広間を飾るカロルス・マルテルスの壁画もポアティエの戦役を題材とせず、フリジア討伐の勝利を描いているのである⁽¹⁾。たしかにポアティエの戦役後も回教徒の攻勢は圧えられず、カロルス・マルテルスは南仏で手を焼いている。七三三年アブデルラーマンの後継者アブデルメリクの復讐はピレネーの峡谷で阻止されたが、アラブ勢は南仏を圧えてプロヴァンスに進出を試みる。彼等は七三五年ナルボンヌを出てアルルとアヴィニオンを占領した。

このローヌ河谷へのカロルス・マルテルスの最初の遠征(七三六年)は永続的な成果をあげられなかった。軽視すべからざることは、この地方がアラブ人を歓迎したことで、まだ確立してなかったフランク人の支配権は殆ど消滅し、地方豪族がそれぞれの地方を分割して居り、その中の若干は敢えてアラブ人と組んでいるのである。七三七年カロルス・マルテルスはアヴィニオンを陥して積極的な工作を試みるが、事態はなかなか好転しない。七三九年アラブ人が再び攻勢に出るとカロルス・マルテルスはロンバルド人をローヌ河谷に呼び入れたが、既にアラブ人は撤退していた。カロルス・マルテルスはプロヴァンスに進み、マルセイユに入り、キリスト教徒に叛いたものの財産を没収した。アラブ人はまだナルボンヌを占領していたが、宗教的内紛が相ついで起り、その烈しい攻勢は止んでしまった。攻勢が止んだことはフランク勢に押しまくられたからではない。その後、シャルマンはローラン伝説を残しているが、それも遺憾ながら敗戦の記録ではない。ともかく一応、下火になった回教徒の攻勢が再燃するのは百年後のことである。⁽²⁾

周知の如く、ライン流域で布教活動をしていた聖ボニファキウスは各地の司教や聖職者が自治と会議による地方的な動きを示すのに対して、自ら教皇の命令を實踐してゲルマニアの教皇代理となり、カトリック教会の進展につとめた。⁽³⁾ 教会の地方化に対して反対の立場をとる点ではカロルス・マルテルスも全く同じであつた。野心家であつたオセール司教サワリクスが雷に打たれて死ぬと、その後継者ハインマルがブルグンド人を統轄しようとしていたし、サワリクスの甥にあたるオルレアン司教エウケリウスも地方勢力の確立につとめていた。これらのブルグンド人を圧えてガリアの統一を達成したのはカロルス・マルテルスであつた。彼が聖ボニファキウスの布教に声援をおしかなかったとしても不思議はない。

他方、東ゴート王国の滅亡に乗じて北イタリアに勢力を張つたロンバルド人は八世紀の初頭になると相当の実力をもつてローマを圧迫した。教皇グレゴリウス三世(七三一―七四一)はカロルス・マルテルスに司教アナスタシウスと司祭セ

ルギウスを派して「ロンバルド人の迫害と圧迫」⁽⁴⁾から救出してくれるように頼んでいる。ところが既述の如くカロルス・マルテルスは同じ七三九年にロンバルド人の兵力をかりてアラブ人をプロヴァンスから駆逐した位であるから、ロンバルド人を討つことも牽制することも出来る筈がなかつた。やむなくカロルス・マルテルスは教皇使節を丁寧に迎えて、これに多くの贈物をし、コルビー大修院長グリモンとサン・ドニ修士シゲベルトスに護送させてイタリアに送りかえした。翌七四〇年にも教皇は同じ要求を繰り返しているが、⁽⁵⁾どうにもならないまま、カロルス・マルテルスも教皇もともに七四一年に死んで、これまでのところ両者の結びつきの具体的な結果は何一つ生れていない。蓋しカロルス・マルテルスはゲルマニアを西方のキリスト教世界に組み入れるきつかけを作つた人であると言え、彼は自分の仕事の重要性を十分に理解していなかつたらしい。当時のフランク教会の惨状は聖ボニファキウスが教皇ザカリヤス(七四一―七五二)へ送つた書簡⁽⁶⁾を見ても想像に余りあるものがある。

カロルス・マルテルスの二子、カルロマンヌとピピヌとは地方の叛乱を圧えると聖ボニファキウスの呼びかけをうけてフランク教会の改革に着手する。⁽⁷⁾七四七年カルロマンヌは一切を弟にまかせてローマへ行き、ザカリヤス教皇によつて聖職者とされ、ソラクテ山(ローマの北)に修院を造つていたが、七五〇年頃モンテ・カシノに入つた。その動機は七四六年のアラマンニ人虐殺のショックだと言われている。七五一年三七才のピピヌは曾てウィリブロードスより受洗し、サン・ドニ修院で育てられ、教会に深い理解をもつた人であるが、この時ローマ教会に歴史的な歩み寄りを見せる。ウウルツブルグ司教ブルカルドス(聖ボニファキウスの弟子)と司祭フルラドス(後のサン・ドニ大修道院長)を使者に立て、ザカリヤス教皇に「当時のフランクシアに存在し、王の権力もないのに王の名をおびるもの」⁽⁸⁾について問い糾している。シチリア生れのギリシア人として政治性のあつた教皇ザカリヤスはフランク人のガリアに於ける効績を高く評価していたから、「実権をもつものは、権力のないものよりも王と呼ばれるに適しい」⁽¹⁰⁾と答えている。年代記者は記す、「秩序が乱

されないように教皇は使徒の權威によりピピヌスが王位につくことを命じた⁽¹¹⁾。この記述は *Annales Laurissenses Minores* (MG. SS. I, p. 116) になると一層詳細且つ明瞭になつて、この動きがフランク人の宮宰の懇望によつて実現したものであること、その選出がフランク人の軍隊に囲まれた古式にのつとつたものであることなどを伝えている。しかし教皇がそんな命令を出すことはあるまいからこの記述の真偽を問題にするものもあるが (Jaffé, *Regesta Pontificum Romanorum*, I, a. 751, p. 268)、カロリング朝の発生が教会と結びつくと言うよりも、教皇との関係で考えられねばならぬことを物語つていふと言えよう。ピピヌスはスワソンに集会を催し、七五一年十一月、全フランク人の選挙と、司教等の祝別と、諸侯の服屬とにより、妃ベルトラダとともに王位につけられた。キルデリクス三世と王子とは剃髪されて修院に入つた。こうしてメロヴィンガ朝は消えた。新王朝の年代記者は口をそろえてこの選出が古式にのつとつたものである⁽¹²⁾ことを繰り返して強調し、教会側も聖ボニファキウスを頭とする諸司教列席の下に聖油をもつて王を祝別している。これはユデア的風習を再現したものだとも言われ⁽¹³⁾、マルク・ブロックはスペインの西ゴート王国にしか知られていなかった宗教的特色を指摘した⁽¹⁴⁾。ともあれキリスト教以前の王や指導者は選ばれると楯にのせられるか、或は有力な仲間の肩にのせられて人々に喝采されるのが普通であるが、これにキリスト教的祝別が加つて戴冠式となつたものである⁽¹⁵⁾。特に聖油の意義を強調するのは、そこに宗教的特色を見ようとするからであらうが、時あたかもフランク教会改革の前夜であり、この動きは地方教会との結びつきよりもアルプスを超えて教皇との結びつきに力点がおかれていることを看過してはならない。

ところでその教皇を囲む当時のイタリア情勢は安泰と言う言葉から程遠いものであつた。ロンバルド王国はアルボインの征服(五六八年)からデジデリウスの敗北(七七四年)まで約二世紀に亘つてイタリアを支配するが、最初これに接触

した教皇グレゴリウス一世（五九〇～六〇四）から、その支配の最後のあがきを見とどけた教皇ステファヌス三世（七六八～七七二）に至るまで nefandissimi（憎むべく、わずらわしく、不潔な人々）として描かれている。この粗野な人々の社会では分裂抗争が絶えず、七世紀初頭にカトリックに改宗したものの、土着民との紛争が烈しく、ローマ聖庁を囲むキリスト教会の勢力をはじめ、ラヴェンナを中心とする東方勢力ともたえず抗争を繰り返し、アルプスを挟んで西からはフランク人、東からはスラヴ諸族やフン人の脅威をうけていた。ロンバルド人の民族的英雄としてリウトブランドスは聖画像破壊運動の混乱に際してローマ教会を支持し、東方勢力を圧えて一時ラヴェンナを占領したこともあったが、その子アイストルフスはラヴェンナは勿論、ローマをも攻撃する⁽¹⁶⁾。教皇ステファヌス二世（七五二～七五七）は曾て教皇グレゴリウス三世がカロルス・マルテルスに呼びかけた様に、フランク王国のピピヌスに呼びかけた。ともかくこの交渉は初め極秘裡に行われたらしい⁽¹⁷⁾。七五三年ピピヌスの使節ドロクテガングス（ジュミエージュ大修道院長）がローマに来て、二通の教皇書簡をもつてガリアに帰った⁽¹⁸⁾。ついでピピヌスはクロデガングス（メス司教）とアウトカリウス公をローマに派遣し、これがローマについた時は教皇は出発しようとしていた。既にアイストルフスは教皇の管轄区域に入り込んで居り、来援を求める教皇の要請に対して東方皇帝コンスタンティノス五世はラヴェンナ総督領の回復につとめ、ロンバルド王とのことは直接交渉を説いてやまない。教皇はこの意向を伝える東方皇帝の代表とピピヌスの使節団とローマの貴族若干とをつれて十月十四日にローマを出発、パヴィアに入つてアイストルフスと交渉するが埒があかない。しかしこの交渉の間教皇が東方皇帝に従属するものとして行動していることは銘記すべきである⁽²⁰⁾。終に教皇はアオスタ河谷（*Francia* *clusas*）から北上して今の大聖ベルナルド峠を超え⁽²¹⁾、十二月にサン・モリス修道院につき、そこでサン・ドニ大修道院長フルアドスとロタルドス公の出迎えをうけ、更にポンティオンの王宮に向い、讃美歌のうちに無事到着を見たのは七五四年一月六日であつた⁽²²⁾。このとき教皇が皇帝に代つてラヴェンナ総督領の返還をも要求している気持は当時のロンバルド人の勢

威からもよく分るが、この問題はフランク王にとつては実力による解決即ち討伐しか考えられず、従つてピピヌスの遠征はやがて教皇領の献呈となつて具体化する筈であつた。そうなると帝国領をそのまま継承し領有することになるから、最初のうちこそフランク王は *Patricius Romanorum* であるが、東方帝国との関係を儀礼的なものではすまされず、西方はその実力による成果にやがては帝権の衣を着せ、終にはそれを東方帝国に承認させるシャルマンの晩年まで交渉を続けねばならない。⁽²³⁾ フランク王が遠くバグダッドに住むハルーン・アル・ラシッド王と使節を交換したりする動きの背後にはこの様な東方帝国に対する配慮もないわけではないのである。老令の教皇は健康を害し、そのまま冬をサン・ドニ修院で過すが、フランク王国とロンバルド王国の間には再三交渉が重ねられ、殊にロンバルド側はピピヌス王の兄カルロマンヌス(モンテ・カシノ修士)を使者に立てて交渉の打開を図っているが、何れも成果を見ない。七五四年春クイエルの会議では、かなりの反対を押し切つてロンバルド遠征が決議されるとともに、はつきりとラヴェンナ総督領の返還、ローマ公領の維持を約束している。⁽²⁴⁾ ピピヌスは七月二十八日サン・ドニで改めて教皇から家族もろとも祝福をうけ、爾後ピピヌスの子孫の中から王を選ぶことが命ぜられた。⁽²⁵⁾ と言う。この祝福が教皇の大病をした前であらうと後であらうと、両者の結びつきは善意にもとづく約束の域を出ぬものであり、即ち教皇の側から見れば不安なイタリアの実情はフランク王自らの出馬を期待する以外に何の希望もなく、国王の側から見れば実力ある地方勢力の抬頭を制して王号の尊嚴を維持するにはローマ教皇の祝福ほど効果のあるものはなかつたのであらう。両者の利益はここに固く結び合つたが、まだそれを保証するだけの政治力も経済力も宗教的権威も軍事遠征も実現されていたわけではない。凡ては見込みの上に立つた約束でしかなかつた。だからこの約束には首をかしげるものもいて、既述の如く遠征の決議にはかなりの抵抗も見られたのであらう。ともあれ *Patricius Romanorum* を囲む遠征軍はアルプスを超え、ロンバルド人を制圧し、アイストルフスは征服地の譲渡を約束せざるを得なかつた。アイストルフスを信用しない教皇は譲渡の実施を監督してくれるようにピピ

ヌスに要求しているが、その望みはかなえられなかつた。⁽²⁶⁾

教皇ステファヌス二世がローマにもどつたのは七五四年十月末のことと思われるが、アイストルフスの方は予想の如くフランク軍が撤退すると再び掠奪を始め、教皇はその苦悩を二通の書簡に認め、第一のものを自分に随行して来たサン・ドニ大修院長フルダスに、第二のものをノメンタヌム司教ウィルカリウスに托した。⁽²⁷⁾ 七五六年一月一日ローマは敵に包囲され、教皇は求援の使節（オステイア司教ゲオルギウス他二名）を海路によつて派遣した。使節の持参した三通の書簡⁽²⁸⁾は、第一が教皇から国王へのもの、第二が教皇をはじめ「苦境に立つ」（in afflictione positi）聖俗のローマ人全部からフランク人全部に当てたもの、第三は特に使徒聖ペテロ（Ego Petrus apostolus）の名に於て教皇とローマ教会がフランク人全部に向い容易ならざる緊急事態を訴えたものである。⁽²⁹⁾ これら三つの書簡は何れも二月末に記されたものと推測される。ローマ側からすればこの苦衷が予測されたからこそ、七五三年の教皇のアルプス超えもあり、七五四年のロンバルド人討伐もあつたのである。しかしまたロンバルド側に立てば、東方帝国が衰頹するのに対し、その役割を継承すべきはロンバルド人自らであり、ローマ教皇でもなければローマの地方勢力でもなく、またそれを支援するフランク勢力でもないのであつて、断じてローマ教皇領（*Respublica Romanorum*）などを許容することは出来なかつたのであろう。

ローマ側の苦悩の訴えは聞かれ、ピピヌスはアルプスを越えたが、この戦闘の最中に東方帝国の使節がローマに来て、更にピピヌスにも会い、ラヴェンナその他を「帝国政府の手にとりもどそう」（*imperiali concederet ditioni*）と努力していることは注目に値する。⁽³⁰⁾ ローマ周辺の実質的な支配者となつた教皇は東方皇帝の首権を明確に否定したわけではないが皇帝としてはローマ周辺に於て最早その実権の存在を示す機会も方法もなく、恰もフランク王国に於ける実情がメロヴィンガ朝からカロリング朝に移行したのと相似たものをもつ。もしそこに実力の発動を必要とすればピピヌスの兵力以外に問題となるものはなく、その発動理由は対内紛争の解決と言うことになる。⁽³¹⁾

新しい講和条件は前よりも一層厳しいものとなり、コマッキオの譲渡が付加され、賠償がとられ、フランク人に対するロンバルド王の貢税が再生され、その条約実施を監督するため大修院長フルラドスが部隊とともにイタリアに留置され、これらのものは町から町をロンバルド人の委員とともに巡回し、それぞれの町の鍵と人質と貴族 (*primati*) の代表を差し出させた。彼等はローマにもどると聖ペテロの告白場にピピヌス王の教皇庁への贈物の表と町の鍵とを置いたと伝えられている。Donatio Pippini と言われるこの贈物の表と言うものは今日残存しない。しかし教皇ステファヌス二世の伝記がその内容を告げてくれる。⁽³²⁾それによるとコマッキオとラヴェンナに次いで北のフォルリから南のイエジとシニガリアに至るまでの海からアペニン山地までを含む。marca (国境兵備地帯) とやがて呼ばれることになる地域やアンコナはフエンサ、イモラ、ボロニャ、フェララとともに含まれていない。

七五六年アイストルフスが死んでその後継者デシデリウスが王となり、七五七年フエンサ、イモラ、フェララ及びアンコナ、オジモ、ウマナ等 (リウトブランドスの占領したもの) の譲渡を約束しながら、⁽³³⁾フエンサとフェララしか渡さず、次の教皇パウルス一世 (七五七―七六七) の時になつてもこの交渉は難航をつづけている。⁽³⁴⁾

教皇の力をかりて新しい王朝を開いたピピヌスは七六八年九月二十四日に五四才で死ぬまで一度もローマへ行つたことはないが、教皇と連繫してフランク教会の再建につとめるとともにアクィタニアの統治をかため、未完成ながらキリスト教世界の基礎をおいた。当時のフランク教会の実情は七五五年の Concilium Vernense を見ても、同年秋のメスの七箇条や七五六年秋の Decretum Vermeriense を開いても、七五七年五月の Decretum Comendiense を読むだけでもその内容の充実に苦しんでいることが分り、⁽³⁵⁾その苦闘はゲルマニアの布教とともに当分つづくのであるから、ピピヌスの目標としているものが北イタリアを挟んでローマとの連繫であることは多言を要しない。そのローマが聖使徒の座と言う古い伝統をもつとは言うものの、周辺に渦巻く地方勢力の動向は不定で、それを圧えるに足るだけの実力もない東方帝国の

管理下にあり、その東方帝国の衰運に乗じてイタリアの南北を圧えて意気軒昂のロンバルド人は粗暴な性格から地方民の反感をかつているばかりでなく自分らの内輪もめでも分裂対抗に明け暮れて居り、イタリアに於ける生活の不安は決して小さなものでなかつた様である。ローマ教皇の切実な訴えによつてイタリアに介入させられたカロリング朝の諸王はこの問題が意外にも実力だけで簡単に解決出来るものでなく、東方帝国との困難な折衝を重ねなければならぬ羽目に落ちた。ところでロンバルド王デシデリウスは七五八年頃からはラヴェンナの回復につとめる東方帝国と組んで行動して居り、その後ピピヌスもイタリアの平和を希うの余り、妥協案を出して教皇にスポレトやベネヴェントに対する保護権を放棄させようとしたり、彼我の領域にあるそれぞれの利権を相互に尊重させることにつとめたりしている。ローマはここ暫く東方帝国とロンバルド人の妥結のみならず、聖画像破壊運動をめぐつて東方帝国とフランク王国の接近をも憂慮せねばならぬ。ただピピヌスが極めて常識的な人であつたから、教皇の訴えにひきずられてイタリアの領土問題に深入りしなかつた様に、東方から送られて来る神学者まがいの使節にも耳を傾けなかつたことはもつての幸いであつた。要するに *Codex Carolinus* (MG. EP. III, pp. 507~558) の伝える教皇パウルス一世の書簡 (no. 1243) は実のともなわぬ東方帝国の外交が雲散霧消して行く経過を物語る。折しも西方の回教圏では内訌がつづき、その方面からのさし迫る危険が一時やわらぐと、ピピヌスは教会の保護を名として七六〇~七六三年、七六五~七六八年にかけて毎年アキタニアに出征して遂にこれを服屬させた。この路線はそのまま次のシャルルマンによつてサクソニア遠征に踏襲されている。ともあれ實力に於てアウストラシアの豪族の域を出ないカロリング家がフランク王を名のり、西方に於けるキリスト教会の擁護者としての活躍を可能にしている動きの出発点には教皇に支持された戴冠式があることを否定し得ない。ところがこの名目上の解決を最も困難にする伝統的な動きは兄弟による遺産の分割相続の風習であつた。公私の利害はここに於て極端に対立するのが常で、その至難な動きは時に兄弟の死去や修院入りによつて解決され、或は王号を超えた帝位につくことによつてそ

のキリスト教的使命が高揚されようとも、一般社会に与える動揺に少なからぬものがあつたことは八世紀半から九世紀半にかけての歴史を概観するのみで自ら明らかである。

アキタニア遠征の末期にピピヌスは自分の死の近きを予知して二人の王子(後のシャルマンと弟のカルロマンヌ)に王国を東西に分け、そのために父の死後、兄はノワヨン、弟はスワソンで登位した⁽³⁷⁾。両者の協力は半年と続かず、七六九年三月、弟は兄のアキタニア遠征を支持しない。両者は七七〇年初頭に一応妥結し⁽³⁸⁾、兄は教皇の反対をおし切つてロンバルド王女と結婚するが⁽³⁹⁾、これから数ヶ月を経ずして両者の関係はまた不穏になる。両者とも曾て教皇により王位の相続者として祝福されてはいたものの、キリスト教的な要素が両者の即位に強く動いて彼等をつつましく行動させたなどと予測するが如きは全くいわれのない妄想である。Einhardus の Vita Karoli Imperatoris, 3 (MG. SS. II, p. 445) を見ても「フランク人は厳かに総会を開き両者を王としたが、王国全体を同じ位に分け、カロルスは父ピピヌスがもつていた部分を、カルロマンヌスは叔父カルロマンヌスの治めていた部分を、それぞれうけとつて支配すると言う約束であつた。両者ともその条件を入れて、銘々自分にあてがわれた通りに王国を二分して受けた。非常にむづかしかつたが、この一致は保たれた。その仲を裂こうとするものがカルロマンヌスの側に多く、戦争で片づけようと言うものさえあつた。…カルロマンヌスは共同に二年間、王国を統治してから病歿し、カロルスは弟が死ぬとフランク人全部の同意で王とされた」と記されている。教会が王を作るなどとは誰も考えていない。

ローマでは七六七年六月二十八日教皇パウルス一世が死ぬと、周辺の貴族はここ暫く続いていた聖職者の官僚政治に反撥したものか、その指導者たるトト公は自分の弟コンスタンティヌス二世を推挙して七月五日に登位させた⁽⁴⁰⁾。これを見ると教皇がフランク王によつて *Respublica Romanorum* の管理権を保証されたことはローマ周辺の貴族の発言権をも増

大させていたことが分る。今まで通りに東方帝国とロンバルド人とを制し、フランク王の支持を得るためには自分らの中から教皇を選出することだと簡単に割り切つて考へてゐることが分る。⁽⁴¹⁾ トト公によつてとられた非常手段に対し、教会側の防禦力の中心は *primicerius* のクリストフスであつた。新しい動きにあくまで反対のクリストフスは子のセルギウスとローマを脱出し、スポレト公とロンバルド王の協力を得て漸く七六八年七月末ローマにもどるが、対立教皇コンスタンティヌス二世は既に一年二ヶ月もラテラノ宮にいたことになる。ロンバルド王の支持する修士フィリップスを拒けてシチリア出身の教皇ステファヌス三世(七六八―七七二)が登位したのは八月七日のことで、その後まもなくコンスタンティヌス二世はその仲間とともに盲目にされた。この報告の使者が⁽⁴²⁾ フランク王国にいた時、ピピヌスは既に死んでいた。対立教皇の問題には重要性もあるので、フランク王国では聖書に精通し、教会法にも明るい人々が選ばれてローマに派遣されることとなつた。⁽⁴³⁾ 使節の長はサンス司教ウィルカリウスを筆頭に⁽⁴⁴⁾ マインツ、ツール、リヨン、ブルジュ、ナルボンヌ、ランス等の *metropolitani* とアミアン、モオ、ウォルムス、ウウルツブルグ、ラングル、ノワヨンの司教を併せて計一三名がローマにつくとイタリア各地の司教を加えて計五〇名が七六九年復活祭後ラテラノで協議した。⁽⁴⁵⁾ 出廷した盲目のコンスタンティヌス二世は抗弁したり歎願したりした挙句、人々の憤激をかつて「教会の外へなげ出された」(*extra ecclesiam eiecerunt*)⁽⁴⁶⁾ と言つた。こゝで教皇選挙について、教皇に選ばれるものは要職についたことのある司祭乃至助祭でなければならず、またその選挙は聖職者の団体によつてなされなければならない、もし平信徒が選挙に介入すれば破門されることなどが決められた。⁽⁴⁷⁾ これは大体これまでの習慣にもとづくもので、教皇が選ばれて *patriarchium* につれて来られた時にはじめて部隊 (*exercitus*) や貴族庶民は祝賀に参上すべくで、選挙の際には近在の人々がローマに入ることも禁止している。フランク王の即位がローマ教皇と結びつくまで本質的に動揺を見たとすれば、ローマ教皇の登位はフランク王と結びつくまで現象的に動揺したと言える。しかもこの動揺する両者の結びつきをめぐつてキリスト教世界の歴史的形が見ら

れるのである。

教皇選挙に一応のすじを通したとは言うものの教皇ステファヌス三世はフランク王とロンバルド王の接近に憂慮している。⁽⁴⁸⁾ と言うのもフランク王の母ベルトラダは自らイタリアに赴いてロンバルド王女との婚約をととのえろとローマへ向い教皇に会つてロンバルド王が領地返還の意思をもつことを伝えている。⁽⁴⁹⁾ こうして道をあけられたロンバルド王は教皇と直接交渉に入る。七十七年の四旬節には「祈願のため」(orationis causa) と称し、巡礼としてローマに現れる。教皇の周辺には顔見知りもあり、殊に cubicularius のアフィアルタとは懇ろであつたと言う。ロンバルド王の到着を知つたクリストフスとセルギウスは警戒をゆるめず、近在の殊にペルジアから部隊をローマに呼びよせ城門を固めていた。ロンバルド王はヴァチカノに近く陣を張り、教皇を会談に招いた。教皇は聖ペテロに行き、またラテラノにもどつた。これが内乱の始まりとなつた。⁽⁵⁰⁾ 暫く前からアフィアルタとクリストフスの対立でローマは二つの陣営に分れていたのである。教皇が聖ペテロからラテラノにもどるとクリストフスとセルギウスとは業々しく身を固めて敵の謀叛を云々し、それをなだめるのに教皇は苦心したが、騒ぎがおさまらないのでロンバルド王の許へまた出かけた。間もなく教皇からの使者と称して二名の司教が城門に現れ、クリストフス父子が聖ペテロに出頭することを命じた。当然、父子はためらつたが、部下の裏切りにせられて、その夜のうちに聖ペテロへ出向いた。翌朝、教皇は聖ペテロでロンバルド王列席の下にミサをすますと父子を敵の手中に残したままラテラノに帰つた。その夜アフィアルタとロンバルド王は父子をつれ出して聖アンジェロの橋側で彼等の眼をえぐつた。クリストフスは三日後に死去、セルギウスはラテラノの牢に一年間も入れられていた。教皇は七十七年二月三日に死んだが、それより八日前、教皇の弟ヨハネスとアフィアルタとはセルギウスを牢から引き出して首を絞め、生殺しのまま埋葬させた、と言われている。

既述の如くアルプスの北では七十七年十二月四日カルロマンヌス王が死んで、王妃ゲルベルガと遺児二名が残された。

シャルマンが単独の王となると、寡婦ゲルベルガは二児をつれてロンバルド王国へ逃げ込んだ。

教皇ハドリアヌス(七七二―七九五)はローマ地方の名門から出てラテラノに育った人で、その選挙は堂々と正式の手續をふんでいるから、その登位は凡ゆる点で人々を満足させた。教皇がゲルベルガの逃げ込んだロンバルド王国との關係を憂慮していると、ロンバルド側は積極的に出てフェララ、コマッキオ、フェンサを占領し、七七二年三月末その部隊はラヴェンナに迫っている。教皇はクリストフス父子事件の責任者の始末をつけると父子のために聖ペテロで丁重な葬儀をし、ロンバルド人とは全く手を切る態勢をとっている。ロンバルド王としては教皇とまた会つて対フランク政策を組もうとするが、教皇は領土の返還を前提条件にしてこれに応じようとはしない⁽⁵¹⁾。この模様を伝える使者は七七三年一月シャルマンの許に着いている⁽⁵²⁾。カルロマンヌスの遺児を伴い、ローマに南下する態勢を示したロンバルド王に対し、教皇は民兵を城下に集結し、万一に処しての戦備をととのえ、もしロンバルド王が進軍を続ければ破門すると宣言した。ヴィテルボまで来たロンバルド王は南下を断念してパヴィアにもどった⁽⁵³⁾。折しもシャルマンの使節(アミアン司教ゲオルギウスとサン・ドニ大修院長グルファルドス)がイタリアに現れ、ローマに赴き、更にパヴィアにも出て領地の譲渡をすすめるが、ロンバルド王は頑として応じようとしない。この通知をうけたシャルマンはロンバルド王に使者を派してその譲渡の代償に黄金の提与まで約束するが、それでもその申し出は拒否されている⁽⁵⁴⁾。七七三年五月シャルマンはジュネーヴに部隊を召集し、二隊に分れてイタリアに侵入、ヴェロナを陥してパヴィアを囲んだ⁽⁵⁵⁾。この時ロンバルド側についていたスポレト公領とベネヴェント公領が解体し、その中の都市が教皇に恭順を誓つて、その地方一帯の「住民」(habitatores)が教皇直属になつたことを看過してはなるまい。それは彼等の土地がロンバルド領であるよりは教皇領であることの方がより安全であつたからであらう。しかしシャルマンがサクソニア遠征をさしおいてイタリアに部隊を入れたのはキリス

ト教会の危機を感じたからではない。もしロンバルド王がカルロマンヌスの遺児をもり立ててローマを手中におさめればイタリアの運命もフランク王国のあり方も一変せざるを得なかつたからである。こうして目前の利害が彼等を駆つて行動させているのであるが、それは結果に於てキリスト教世界を成立させる教皇と国王との連繫を固めるのみであつた。

パヴィアの攻囲は七七三年九月から七七四年に入つても続き、シャルマンは復活祭が近づくとローマに巡礼をした。⁽⁵⁶⁾ 教皇はこれをブラッチャノ湖まで丁重に出迎え、王は聖土曜日にローマの民兵と子供等が棕櫚を手にして並び讃美歌をうたう中をローマ郊外に着いた。これは総督に対する歓迎と同じであつた。⁽⁵⁷⁾ 十字架の群を見るとシャルマンは馬を下り、聖ペテロまで歩いた。教皇は聖職者等とともに階段の上でこれを迎え、中へ入れた、と言う。両者が互に誓約を立ててから始めてシャルマンはローマに入つたが、それは復活祭後の水曜日であつた。⁽⁵⁸⁾ その日(四月六日)、教皇はシャルマンが父や弟とともに七五四年クィエルシで認めた文書を提示しその実施を求めたが、この時シャルマンは「前と同じ内容の」(ad instar anterioris) 寄進を自分の名で認めている。⁽⁵⁹⁾ その内容は七五六年フルダス大修院長が聖ペテロの墓に置いた総督領その他に加えてスポレト公領、ベネヴェント公領、全トスカナ、コルシカ、ヴェネティア、イストリアを含んでいた。また総督領は北西にひろげられてパドワの南にあるパルマ、レッジオ、マントワなどを含むものになつて⁽⁶⁰⁾ いる。もしこれが文字通り実施されるとロンバルド王領を大きく削つて殆どイタリアの四分の三が教皇に所属する筈であつた。⁽⁶¹⁾ パヴィアは六月にシャルマンの手に落ち、彼はロンバルド王を称する。この時から彼はローマに対する保護の義務を支配権に変えたとも言われる。この際、ラヴェンナ教会がその伝統的重要性を固執して独自の動きを保持し、なお教皇領の一部を圧えて離さなかつたことは注目に値する。⁽⁶²⁾ ローマ教会が既に七世紀からこのラヴェンナの動きと苦闘していたことは周知の事実である。⁽⁶³⁾ 同様な事情はスポレト公領やベネヴェント公領は勿論、キウジ公領やフリウリ公領にも存在していたから、⁽⁶⁴⁾ その背後に動く東方勢力を無視することが出来ず、教皇ハドリアヌスは教皇領の動向について少なからぬ配慮を

せねばならなかつた様である。

シャルマンはサクソニアを一応服属させたものの、七七八年のスペイン遠征は大失敗、この敗戦に乗じてサクソニアにも叛乱が起きた。⁽⁶⁵⁾ イタリアの教皇も苦情をシャルマンに訴えている。⁽⁶⁶⁾ 相ついで出される書簡はイストリア、カンパニア、ガエタ、テラキナでの紛争を伝えている。ベネヴェントのロンバルド人はシチリアの東方勢力と組んで教皇庁に真の謀叛を企てた様である。⁽⁶⁸⁾ シャールマンは七八〇年のサクソニア遠征がエルベ河畔に及んだのでその年のクリスマスをパヴァで迎えようと家族を同伴してアルプスを超えた。こうして七八一年の復活祭をまたローマで過すが、この時の記録は余りない。⁽⁶⁹⁾ この時、王子ピピヌスは受洗してイタリア王となり、王子ルイはアクィタニア王として聖油をぬられた。東方の幼帝コンスタンティヌス六世（一〇才）の摂政をする帝母イレネからもシャルマンの許に使節が到来し、フランク王女との婚約を成立させている。⁽⁷⁰⁾ サビナ領 (patrimonium Sabinense) は明記してその権利が教皇のために復活されたにかかわらず実施が困難で、これを監視させるためにシャルマンはイタリアにイッテリウス（聖マルタン大修道院長）とマギナリウス（後のサン・ドニ大修道院長）を残した。⁽⁷¹⁾

七八三〜七八五年はサクソン人の叛乱の鎮圧にあてられている。恐ろしい弾圧が組織され、ヴェルダンで虐殺があつた様である。⁽⁷²⁾ 七八五年末になると叛乱の将、ウィティキントが降服して受洗を求め、その吉報がローマに伝えられると、ハドリアヌスは感動してシャルマンに祝福を送つてゐる。教皇はシャルマンの希望に答えて六月二三、二六、二八日、ローマ世界でこの成功に対する感謝の祈りを命じてゐる。⁽⁷³⁾ この頃、教皇庁は教皇領の存在にもかかわらず財政が窮乏し、聖ペテロその他の屋根を修理するために大梁や錫をシャルマンに要求している。⁽⁷⁴⁾ 東方からの連絡で教皇はバグダッドのカリフのマージ（ハルン・アル・ラシッドの父）が小アジアに侵入し、フリギアのアモリウムまでおしよせたことを知りこの情報をすぐフランク王へ伝えた。⁽⁷⁵⁾ これらの動きを見れば教会をめぐる共通の利害がこの頃になるとまぎれもなくアル

プスの南北を結んで一つの世界を作り出していることが分る。シャルルマンは七八七年初に第三回目のローマ訪問をする。その目的は東方帝国の陰謀とからんで動くベネヴェント問題の解決で、シャルルマンは人質をとると復活祭までにローマにもどつてゐる。同様な謀叛を繰り返すバワリアもシャルルマンはその年の秋の遠征で完全に征服した⁽⁷⁶⁾。

七七四年以来 *Patricius Romanorum* であるとともに *Rex Langobardorum* であるシャルマンの度重なる出馬によつて現地の紛争に一応の解決を得た教皇は中世を通じて一八七〇年まで存続するローマ周辺の直轄領を確保するとともに、ラヴェンナ総督領やペンタポリスの地方、更にアドリア海岸とローマをつなぐ中間地帯のアメリア、トディ、ペルジアを保有することになつたが、スポレト公領は圏外におかれることとなつた。シャルマンの行動を通して確認されることは彼のイタリア管理がローマ教皇領に対してのみは他と区別されていると言ふことであろう。スポレト公やベネヴェント公などはもともとシャルマンの官吏たるべきもので事実上の家士 (*Vassus*) である。何せ遠いイタリアのことでもあるから或る程度の地方自治を容認せねばならぬが、勿論シャルマンの権威に服するもので、その選任乃至相続は彼の左右するところであつた。つまり彼等は彼の名に於て統治したのである。これまで残存した東方的要素は払拭された⁽⁷⁷⁾。ところが教皇については全く別でシャルマンはその指名もしなければ確認さえもしない。その登位についても何等干渉しない。教皇は俗権に対しても聖使徒の代表として一切の権利を行使する。その直接原因が *Donatio Pipini* によるものか、東方帝国の衰微によるものか、何れにせよ、シャルマンは事実上の権威としてこれを確認し保護しようとしているのである。これこそカロリング朝の王と教皇との間に爾後繰り返される「愛と誠実の」約束の核心である。教皇はローマの城壁を固め、水道を修理し、名目上は東方帝国と断絶しなかつたものの七八一年からは教皇の年代で教書を出し、貨幣を鑄造し、官吏を駆使している⁽⁷⁸⁾。しかもなおこの奇妙な領地では何等かの形で暴力が動くとそれを阻止してくれるだけの俗権が必要であつた。実情の判定は屢々困難を極めた。教皇庁の問題に初め積極的な関心を示さなかつたシャルマンも

事の重要性を意識したのか、ラヴェンナ大司教の選出に代表を送る権利を要求したりして教皇に拒絶されている。⁽⁷⁹⁾ こうして一応の落着きを見せたイタリアに対してシャルマンはその後、殆ど干渉を試みた形跡がない。七九五年末に教皇ハドリアヌスが死んで新しい教皇レオ三世(七九五―八一六)が選出された際にも全然それには無関係である。しかしシャルマンはイタリア問題に無関心であつたわけではなく、教皇庁の役人や地方官吏がシャルマンに直訴する道は開かれて居り王は事実としてその様な直訴を歓迎したらしい節もある⁽⁸⁰⁾のである。要するにフランク王も教皇もこの様な暗黙の一時しのぎに生きるより他に致し方のない時代にいた人々であることを忘れてはならぬ。それは原理原則をうたえない妥協の産物であつたと言える。

七九五年末、教皇となつたレオ三世は前の教皇をはじめその周囲の聖職者等に人望のあつた人であるが、早速その選挙の様様をシャルマンに報告(*decretalis cartula*)し、聖ペテロの祭壇の鍵とローマの旗を送っている。フランク年代記者の伝えるところによると、この時、教皇はフランク王にその要人(*optimates*)の一人をローマに派遣して人々の誓約をうけるように申し送っている。⁽⁸¹⁾ その結果としてアンギルベルトス(聖リクイエ大修道院長)が派遣されている。これまでにないこの新しい動きは何う解釈されようとも、⁽⁸²⁾ 教皇庁とフランク王国との関係の緊密化を示すものであろう。教皇は登位後まもなくラテラノ宮に大広間(*triclinium*)を造らせている。⁽⁸³⁾ 教皇レオ三世は人望のあつた人だつた様であるが、前の教皇の遺族を中心とする反抗運動のため思わぬ妨害をうけていた様で、七九八年夏ローマにパリウムをうけに来たザルツブルグ司教アルノもアルクイヌスにローマの紛争を伝えている。⁽⁸⁴⁾ 彼等の陰謀は七九九年四月二十五日即ち聖マルコ福音史家の祝日の祈願祭(行列とミサ)に大事件を起した。行列の出発するルキナの聖ラウレンティウスまで教皇は馬で行つたが、途中で二名の高官(前教皇の甥パスカリスとカンプルス)⁽⁸⁵⁾に迎えられ、聖ステファヌス・シルウェステル修院の前まで来ると兵士等がかくれ場所からとび出して教皇に襲いかかった。周囲にいた人々は兵士を恐れて逃げた。教皇はパ

スカリスとカンブルスにより乱暴につかまえられて地上に投げ出された。人々は教皇の眼をえぐつて盲目にし、舌を切つて街路に棄て去つたと言う。不信の輩はその後、教皇を修院の祭壇に引き込み、祭壇の前でまた両眼と舌を残酷に切り、さんさん打擲し傷を負わせ、流血で半殺しにしてからその場に棄て去つたと言う。この *conati sunt* とか *dimiserunt* とか言う句を何う言う風につないで解釈しようとも、要するに他人の噂話をまとめた内容を或る程度以上に明確に把えることは出来ない。たしかに打たれて傷つき血が流されても *oculos evellere, lingua praecisa* と言う句を *bis oculos et linguam eruerunt* と重ねて記す目的は、爾後の教皇の視力も口舌もある平然たる行動と結びつけて奇蹟を印象づけるようとしているのであろうが、そこには思わぬ流血とうまく行かなかつた事の重大さに動転している陰謀者の姿しか想像出来ない。一度、街路に打ちすてたものを、また修院の祭壇まで引きずり込んで乱暴したのが同一人だとは記していない。同じ乱暴するのに祭壇まで何故はこぶ必要があるのか、不信の輩と呼ばれているものが何故その様な面倒をあえてしたのか、も全く分らない。暴徒は結局、極めて正確な指示に従い、かなりな仲間をもつていた様であるが、教皇の眼と舌をつぶすことに失敗したばかりでなく、教皇の身柄を盗みとられぬために夜中に聖エラスムス修院に移すことによつて教皇に逃亡されてしまうことになり、その失敗の上塗りをしている。銘記すべきは教皇の視力と口舌の回復が記録されている場所がこの聖エラスムス修院だと言うことである。⁽⁸⁶⁾ 教皇は若干の忠実な仲間によつてそこから聖ペテロに移された。急報をうけたスポレト公ウィニクスは部隊をつれて来たが、暴徒が既に市を圧えていて何も出来なかつたと言う。当時サクソニアのパデルボルンにあつて新しい遠征の準備をしていたフランク王はケルン大司教ヒルデバルドスを派遣して教皇を呼び、王子ピピヌス(イタリア王)が途中まで出向き、また王自らもこれを宮中に盛大に迎え入れたと伝えられている。⁽⁸⁷⁾ その年の秋、教皇はかなりの数の司教と伯とに護られてローマにもどつた。途中の歓迎はまるで凱旋行進の様であつたと言うが、十一月二十九日のローマ入城は更に派手なものであつた。この時の記事が⁽⁸⁸⁾ 図らずも八世紀末のローマの構成要素を

或る程度まで物語つてくれる。

先づ(一) *proceres clericorum* (上位聖職者) と呼ばれる司祭と主要な助祭で、これは教皇庁の主要な役職についている人々であり、(二) *cum omnibus clericis* (一切の聖職者の群) に(三) *optimates et senatus* (要人乃至貴族) と(四) *cuncta militia* (武装した市民全部) が上げられている。(五) *universus populus Romanus* (非武装の全市民) がこれに加えられ、(六) *sanctimoniales* (修道女) と *diaconissae* (助祭の妻) も上げられている。更に(七) *nobilissimae matronae* (貴族の夫人) と(八) *universae feminae* (一般の夫人) と(九) *scholae peregrinorum* (居留民—Franci, Frisoni, Saxoni, Langobardi) がともに教皇帰還の喜びを分ち合つたと言う。

陰謀仲間は教会財産を掠奪すると教皇に対する非難に狂奔していた。⁽⁸⁸⁾ 彼等は確かに謀叛人、大逆罪を犯したものとして取扱われるべきものであつた。⁽⁹⁰⁾ アルクイヌスは七九九年八月、ザルツブルグ大司教アルノへの書簡でシルウェステルの *Canones* によれば、一人の教皇の裁判には七二名以上の証人が必要であること、また他の *Canones* によれば「聖使徒の座は万人を裁くが、誰にも裁かれないものだ」とし、人々がかかわっている方法の危険であることを示しているが、⁽⁹²⁾ 奇妙なことにこの教皇に関する事件については敬虔なアルクイヌスの助言が敬遠されて、シャルマンはパデルボルンにアルクイヌスと呼ばず、ローマでも政治的処置に終始している。ローマに於ける陰謀事件の審問調査(ヒルデバルドスやアルノをはじめ諸司教、諸伯による)ではパスカリスとカンプルスの間が動機について尋問されたが、その累述は余りにも法外なものであつたらしく、その詳細についてのアルノの書簡はアルクイヌスの手によつて焼かれたと記されている。⁽⁹³⁾ アルクイヌスとしてはその様な無責任な悪口雑言をとり上げて教皇を裁く人々の権威に大きな疑念をもつたのであろう。ともかくその裁決はシャルマンに委せられた。ところがそのシャルマンが八〇〇年になつてもガリアを動けなかつた理由の一つに海賊の侵入があることを見のがすわけには行かない。アルクイヌスも同じ書簡(MG. Ep. IV, p. 309)で

異教徒の船が大洋の島々をぬけてアクイタニア海岸を荒したことを伝えている。北方人の活躍が漸く盛んになるうとしていた。⁽⁹⁴⁾ シャールマンがイタリアへ赴く意向を示すのは八月初で、ローマに着いたのは教皇の帰還から一年以上も経た十一月末のことであるが、この第四回目のローマ入りについては凡てが曖昧で神秘的である。Liber Pontificalisもフランク王国の年代記もその外面的経過をよく物語るが、有力者を動かしている原動力については沈黙している。

曾て七九九年六月アルクィヌスは陰謀事件についてシャールマンに書簡 (Ep. CLXXIV) を記し、「今まで世界には重要な三つの人物があつた。その一人は聖使徒の座の名儀人即ち使徒の頭たる聖ペテロの代理者で、この聖座の保持者に最近起つた出事事について貴君の好意は私に知らせて下さつたものです。その次に来るものは帝権の保持者で第二のローマのこの世の主君でありますが、この帝国の主君が外人によるのではなく、仲間たる同国人によつて廃位された評判 (これはコンスタンティヌス六世の廃位とその母イレネの帝権篡奪を指す言葉であろう) は各地で噂になつて居ります。最後は貴君の王権で、わが主イエズス・キリストの御意がキリスト教徒の主君とならしめたもので、実力は前二者をしのぎ、明智でそれらを支配し、権威でもその上に立つています。キリストの教会の安全がかかつてゐるのは今や貴君だけです。貴君は罪をこらし、誤りを糾し、泣く者を慰め、善人をはげます」 (MG. Ep. IV, p. 288) と記しているが、要するにアルクィヌスに従えば当時のキリスト教会で実力者はシャールマンひとりだと言うわけである。確かに教皇は傷けられ逐い出されて権威を失い、東方帝国の皇帝も姿が消えてしまつたのであるから、教会に対する安全の望みはただ一つだと称して、既成事実を正式にうやうやしく表現しているだけである。何れにせよ、この実力者を迎えるローマ教皇の喜び様は並大底でなかつたらしく、迎えに出た姿を記して cum magna eum veneratione suscepit と言ひたり、 summa eum humilitate, summoque honore suscepit と言ひたりする (MG. SS. I, pp. 188~189)。教皇レオ三世は前教皇と同様にシャールマンを接待した様である。

十二月一日に開かれたワティカノ會議でシャルマンは凡てのものに自分がローマに來た理由を述べ、その主な最も厄介な問題は教皇に加えられた傷害事件の調査であることを告げた。⁽⁹⁵⁾ その場に居合せた大司教、司教、大修院長等は異口同音に「神の教会の頭である聖使徒の座を裁くべきでない。古くからそうである様にわれわれも教皇代理も教皇によつて裁かれるが、教皇は誰にも裁かれない」と反対したらしいが、⁽⁹⁶⁾ フランク王国の年代記によれば、少くとも裁判の真似事があつて、原告の訴えはあつても支持するものではなく、聖職者が教皇を裁くことの無資格を主張する以上、教皇は眞実を証明することも誣告を否認することも出事ない状態に直面させられたらしい。教皇は宣誓によつて自己の潔白を公示する以外に何も出来なかつた。教会法では教皇が教会に対する優越権をもつことはないが、これまで教会が教皇を裁いたためしはなく、五〇一年にも *synodus palmaris* は教皇シンマクスを裁くことを拒否した。しかし世俗の法廷で殺人、姦通、謀叛について裁判が行われる場合には全く別で、ローマ帝政下では教皇も免除されなかつたことは六五五年に死んだ教皇マルティヌス一世の例を見ても明らかである。ここでは事態が更に變化して教皇はそのままローマ地方の君主なのであつて、誰も君主を裁くことは出来ない筈である。抑々教皇は如何なる非難的になつていたのであろうか。アルクィヌスの伝える *crimina adulterii vel periurii* (MG. Ep. IV, p. 297) や *de moribus apostolici* (MG. Ep. IV, p. 309) の真相は如何なるものであろうか。これらの情報をアルクィヌスに伝えたアルノ自らは教皇の *religiosa vita et iustitia* を賛美している位であるから事情は皆目不明である。十二月二十三日聖ペテロで教皇が人々の面前で福音書をもつて説教壇に上り、司教と要人を前に宣誓することによつて身の証しを立てたと言う行動(これが所謂 *purgatio* と呼ばれるもの)がシャルマンの意思と結びついていたものか何うかもよく分らない。⁽⁹⁷⁾ 「声高く表明された」(*clara voce dixit*—Lib. Pont. II, p. 7) 言葉の内容は「親愛なる兄弟たちよ、到る処で噂が吹聴されている。どんなによこしまな人々が私に謀叛し、私を不具にしようとし、またひどい罪を私にきせていることか。この事件を問い糾すためにここに居られるカロール

ス王即ち慈悲深く冷静な主君は、諸々の聖職者と要人をつれてこの都市に来られた。このことにつき、私レオ即ち聖なるローマ教会の教皇は誰にも裁かれず強いられず、自ら進んで身を潔め、おんみらの見ている前で、私の心を知り給う神と天使の前に、われわれのいるこのバシリカの建てられている使徒の頭たる聖ペテロの前に、私は身の潔白を証言します。何故なら、私のせいにされているこれらの罪深い冒瀆のことがらを私は犯さなかつたし、また犯すことを命じもしなかつたのです。われらの目の前にあり、やがてわれらもその裁きをうける神が私の証しです。疑いをはらすために私はこれを自ら進んでするのです。教会法にあるのでもなく、私の後継者や司教である兄弟が、聖なる教会の中でこれを前例としたり、きまりとすることもないでしょう」(MG. Ep. V, pp. 63-64)と言うものであつた。⁽⁹⁸⁾ともかくシャルマンは「この事件を問いただすために」(propter quam causam audiendam)ローマに来たのである。最近、出来上つたばかりの教皇領の中での教皇の主権が想像されるほど独立していないことが分る。教皇レオ三世の purgatio は教皇座に特別な光彩を与えもしなければ、不快な記憶を残しもしない。

翌々日のクリスマスには王も聖ペテロのミサに列席し、祭壇の前にひれ伏した王が立ちあがると、教皇はその頭に冠を置き、列席者一同は「皇帝カロルス、神から冠をうけた偉大で平和を好むローマ皇帝に生命と勝利を」(Karolo August, a Deo coronato magno et pacifico imperatori Romanorum, vita et victoria)と喝采した⁽⁹⁹⁾。これは不意の出来事ではなく Liber Pontificalis にしてもフランク王国の年代記にしても行事全部が予め打ち合わされた計画にもとづいていることを示している。教皇、群集、schola cantorum から王に至るまで何れも自分の演ずべき役割を心得ている。帝位をめぐつて教皇と王の間に話がついていなかつたと見ることは寧ろ困難である。年代記は十二月を通じて毎日談合された重大事項について多少神秘的な言いまわしをしている。教皇の復帰もその一つであり、傷害事件の調査もまたその一つであつた。Annales Laureshamensis a. 801 (MG. SS. I, 38)によれば帝位がフランク王に渡されたのは大会議

(教皇の purgatio のあつた十二月二十三日の會議しか考えられない)であつた。會議が帝号をささげたと云う記事は Anskarii Vita Villehadi, 5 (MG. SS. II, 381) にも見られる。⁽¹⁰⁰⁾ シャールマンが東方皇帝に対する遠慮から皇帝の称号を辞退せねばならぬ立場にあり、八〇〇年の戴冠式ももしその計画を予知していたら教会に入らなかつたろうと云うエインハルドスの記述をそのまま信ずるとすれば、同じ筆者の伝えるもう一つの事情即ち当時のローマ人とギリシア人とがフランク人の勢力の伸張に脅えて「フランク人を友としても隣人にはしない」と言い合つていたことや「事実カロルスが皇帝の称号をうけたので、自分から帝権を奪おうとしているのではないかとひどく疑い、自分らの間には何んな衝突の機会ものこさぬように固い同盟を結んだ、云々」と記されている記事など、⁽¹⁰²⁾ ゲルマン人の歴史的登場に際しての看過すべからざる記録と言ふべきものであらう。

何れにせよ八〇〇年のクリスマスの戴冠式に於ける主役はまぎれもなく教皇である。教皇が新しい皇帝を生んだこの日まで教皇とフランク王とはアルプスを挟んで半世紀に亘る協力を重ねている。既述の如くシャールマンは初め Augustus や Imperator の称号を固辞したほど東方皇帝から憎まれた様であるが、シャールマンが帝位につくと言ふことは東方帝国との外交上の困難を別とすればシャールマンを取り囲む当時の西方にはむしろ常識的に当然のことと思われたらしい。蓋しコンスタンティノポリスにあるものを正統の帝位と呼んだとしても、それは当時、女帝イレネ(七九七〜八〇二)によつて占められていた。⁽¹⁰³⁾ 折しもローマにはイエルサレム総大司教から派遣された二名の修士が聖墳墓の鍵と旗とをもつて来ている。確かに教皇が積極的な姿勢をとる戴冠式よりも他の方法をシャールマンが希望したかもしれないことは容易に推測し得る。⁽¹⁰⁴⁾ さりとて彼が皇帝の称号を厭うたのでもなく、教皇でなければ皇帝が出来なかつたと言ふわけでもない。それは晩年になつてシャールマンがひとり生き残つた王子ルドウィクスに命じて王子自身の手で祭壇から冠をとり、戴冠さ

せている事実からも断言し得る。ともあれ八〇〇年のクリスマスにシャルマンが教皇によつて戴冠させられたことが、一つの忘れ得ぬ前例になつて、西方に於ける新しい時代の開幕になつたことは否定出来ない。

しかしながらそれは西方に於けるキリスト教的社会の成立を云々出来るほど各地の教会や修院が充実していたわけでもないし、キリスト教文化世界の統合と言われるほど文化活動が復活していたわけでもない。キリスト教信仰をともしする人々が内外の危機に直面して結束を固めたと言うわけでもない。

古代ローマ帝国の崩壊後、しばらくは北イタリアにその余映があつた。それもロンバルド族の進展によつて消え去ろうとしていたが、ローマ教会を中心とする反撥力がアルプスの彼方のフランク王国と結びついて甦つた。実質的にはライン下流域に根を下す地方豪族にすぎないカロリング朝がローマと結びつくことによつて全フランク王国の教会に呼びかける力を得たことは局面を展開させた。そのままでは所詮その周囲の勢力にはんろうされる危険があつたローマもフランク勢力と結びつくことによつて立場が強化される。教皇と国王の協力はやがて教皇と皇帝の結びつきにまでなる。それでもキリスト教精神による結びつきを安易にうたうことは出来ない。カロリング朝の諸王はこれからキリスト教会の権威に苦しみ、ローマ教皇はカロリング朝の父子相剋に悩まされるであろう。なお且つ王が実力に於て地方豪族の域を出ず、教皇が訴えに於て各地の教会を動かすに足らぬとすれば、この協力は難航せざるを得ない。それは体制の矛盾と云うことになろう。⁽¹⁰⁵⁾

ともあれ古代ローマ帝国再興の夢がフランク王国によつて再現したことは東方帝国も無視することの出来ない事実であつた。ローマの *patricius* が皇帝となることによつて、これまでの曖昧な実情が消え去つた観がある。⁽¹⁰⁶⁾ 元来、ローマは皇帝の支配する都市なのである、聖ペテロの使徒の座を継承するものがその加冠によつて皇帝を生み出したのであるから、確かにそれは誰の眼にも明らかな教会と国家の最高の姿での結合であつた。これまでのコンスタンティノポリスでも総大

司教が新しい皇帝の戴冠式をするのがあたり前のことであつた。と言うのも総大司教は事実上、皇帝の傀儡で、帝意のまに動く従者にすぎず、いわばその宮廷司祭にすぎなかつたから、要するに戴冠式の盛儀要員たるにとどまつたのである。ところが西方では事情が全く異り、東方皇帝に置き去りにされたローマがロンバルド人を始めとする地方勢力に追い立てられ、漸くアルプス以北のフランク王国と連絡して事態の安定を生み出したのであるが、その王シャルマンは聖ペテロの座を自分の力で安全に守るばかりか、自分の財力で他のどの教会よりも美しく飾り、豊かにすること以上に自分の大切な任務はないと思ひ込んでいたほどの人であつた。彼はローマ市を重んじていたのに統治四十七年間を通じてローマを訪ねたのは僅か四度しかない位であるから、⁽¹⁰⁷⁾ 教皇はその点からも断じて宮廷司祭ではあり得なかつた。この戴冠式には何の書かれた約束も取りきめもなかつたが、教会と国家はこれによつて固く結ばれた。事態の動きがここに到る経過を見ると、教皇と国王の結びつきが教皇と皇帝の結びつきになるまでのことは単なる偶然とか或は事件の展開から偶発的に生じた結果などではない。なおまた各時代に最もよく自己を生かそうとした人々の営々たる努力の積み重ねによる産物でもない。教皇も国王も皇帝もそれぞれ周囲の事態に追いつめられて必死な覚悟で行動していることを正視せねばなるまい。教皇がアルプスを超えたのも、国王がイタリアに下りたのも、またローマへの巡礼も、帝位の戴冠式も何かしら当事者の中には選択をゆるさない事情があつて行動されたものの如くである。何れもすき好んでしていることではない。教皇はローマにいたたまれずにアルプスを超えているし、国王も厄介な東方帝国との対決を覚悟しなければアルプスを超えられなかつた筈である。宗教的権威を政治的に利用するとか、政治的権威を宗教的に活用するとか言う封建時代の常識で説明されなくてはならないほど真摯な賭けがそこには認められる。教皇のアルプス超えもシャルマンのローマ巡礼も単なる政略行動ではない。

もし西洋がキリスト教的と呼ばれる世界とすれば、そのキリスト教的な地盤の生成がこの様な記録の上に立つものである。

ることを看過してはなるまい。ローマに使徒の座をもつ教会の救いは確かにシャルマンの双肩にかかつていた。⁽¹⁰⁸⁾戴冠式よりも遙か前にアルクィヌスはシャルマンに対し *christianum tueatur imperium* (Ep. 177-MH. Ep. IV, p. 292) と記し、*ad decorem imperialis regni vestri* (Ep. 121-MG. Ep. IV, p. 177) と記しているのである。「見よ、キリスト教会の安全は凡て貴君だけにかかつてゐるのです」(Ecce in te solo tota salus ecclesiarum Christi inclinata recumbit...Ep. 174—MG. Ep. IV, p. 288)。「キリスト教徒の中にある聖なる神の教会は貴君によつて導かれ高められ保たれるように」(Per te sancta Dei ecclesia in populo christiano regatur, et conservetur—Ib. p. 289) とシャルマンに向つて呼びかけるアルクィヌスはやがて教皇の苦衷を救つた王に対して「あゝキリスト教会のまもり」(O defensio ecclesiarum Christi...Ep. 177—MG. Ep. IV, p. 292) と絶賛しないでいられない。同様な表現はアルクィヌスに限らず、七九九年夏に出来た詩歌 *Karolus Magnus et Leo Papa*, v, 332, 406 (MG. SS. II, p. 399, 400) にも *Augustus* として見出し得るのである。されば史家の中にはシャルマンが周囲の人々と見解を一にし、⁽¹⁰⁹⁾ローマへ赴くに際して既に決定的な行動をとろうと心の準備をしていたと見る人々も少なくないのである。既述の如くそれは回教圏に対する意識などと全く無関係に成立していると言ふことも銘記すべきである。シャルマンのスペイン経営は難航をつづけていたし、スペイン教会はトレド司教エリパンドスを囲んでキリスト猶子説を固執し、南仏には屢々回教徒の侵入も見られたのであるから、一般が回教問題に無関心だつたわけではない。しかし回教問題に対抗して自分等の間にまとまりを見せるほど当時の西方の教会の体制がととのつていたのではないことを無視してはならぬし、また回教圏そのものにも当時は内紛が絶えなかつたことも想起すべきである。更にまたシャルマンが古代ローマから伝承した皇帝の権力について正確な観念をもつていたかどうかも疑わしい。現実に教会を守ることの出来る実力者としてのフランク王が聖使徒の座から帝冠をうけたのはローマでは寧ろ予期されていたことの実現であり、既に教皇レオ三世の建造したラテラノ宮の *triclinium*

(大広間)のモザイコにもその思想が表現されていることを最後に指摘したい。それは一方に於てキリストが聖ペテロに鍵を、コンスタンティヌスに旗を渡す姿を描くとともに、他方に於て聖ペテロが教皇レオ三世に *pallium* を、シャルルマンに旗を渡している場面を示している。ここではシャルルマンを偉大なキリスト教的皇帝、新しいコンスタンティヌスとして表現しているのである。しかしそれはキリスト教的理想の世界を描いたものではない。新しい時代が聖使徒の座をめぐつて手を握ることの出来た感激のしるしであつた。⁽¹¹⁰⁾

註

- (一) Ermoldus Nigellus, *In honorem Hludowici*, IV, 275
~276—MG. SS. I, p. 506 H. Pirenne, *Mahomet et Charlemagne*, 1922 以来、古代から中世にかけての地中海經濟の重要性は周知の事実で七—九世紀のアラブ人の進出によるその擾乱も否定すべからざる現象である。しかし地中海經濟が深刻な打撃をうけるのはむしろ十一世紀のトルコ人の進出によることは一九二六年 L. Halphen がケンブリッジでの講演で明かにした通りである (*La conquête de la Méditerranée par les occidentaux aux XI^e et XII^e siècles—A travers l'histoire du Moyen Age*, 1950, pp. 337~342)。また M. Bloch (*La Société Féodale, la formation des liens de dépendance*, 1939, pp. 10~17) も回教徒のことを西方に侵入した人々の中で最も危険の少いものであつたと述べている。七三年のアラブ人はポアティエを占領していないことも確認しておきたい (M. Garaud, *Note sur la cité de Poitiers à*

キリスト教世界の成立について

- Époque mérovingienne—Mélanges d'histoire du Moyen Age dédiés à la mémoire de Louis Halphen*, 1951, p. 273)
- (二) 回教徒は八四六年八月二十三日、ティベル河口に上陸した。河口の Porto も Ostia も住民が逃亡して無抵抗であつた。海賊の本隊はティベル右岸を遡り、聖ペテロのバシリカを占領して掠奪した。ローマ側は Porto まで外人部隊の精鋭を派遣したが敗走してしまつた。フランク勢も馳せ参じたが忽ち潰走している。聖パウロのバシリカも掠奪された。カンパニアの民兵がティベル左岸で漸く勝利をおさめた。回教徒はローマの城壁をぬくだけの兵力をもたなかつたのでローマを断念して南下した。スポレト公の部隊がこれを追つて陣地を襲撃したものの逆に大打撃をうけた (*Liber Pontificalis*, II, p. 104, n. 38)。Napoli と Amalfi から北上した艦隊の動きで幸いそれ以上の悲劇にはならなかつた。回教徒の中にはベネヴェント公領に定着しようとしたものもあつたが、やがて戦利品をつんで帰路につき、それが北阿に着く前に暴風で難破している。八四七年に

回教徒駆逐の遠征軍が成立し、回教徒は漸くイタリヤから追放された。

(c) 「使徒の座に仕えんこと」 (in servitio apostolicae sedis) 生れ且て死のていつじふ事。cf. Kleinclaus, Charles Martel et Pépin le Bref—Lavisse, Histoire de France, 1911, II, I. pp. 262~266.

(4) 'persecucionem et oppresionem gentis Langobardorum—codex Carolinus 1 (MG. Ep. III, pp. 476~477) ロンバルド人の残虐性について既にその論がフランク王国に及んでゐた (Fredegarius, chronica, IV, 71—MG. SS. rer. Merov. II, pp. 156~157)° それが Liutprandus の出現まで約一五〇年間に、内訌で氣勢が衰へたことは言へるものの、ローマに於いても厳しう圧迫を蒙るゐてゐた (A. Breyton, La conquête franque en Lombardie, 1890—Mélanges carolingiens par Bardot, Pouzet Breyton, p. 9)°

(5) Codex carolinus 2—MG. Ep. III, pp. 477~479.

(6) S. Bonifatii et Lulli Epistolae 50—MG. Ep. III, pp. 298~302.

(7) 十四二年四月二十一日の Concilium Germanicum はカロロンヌスの開きだもの (MG. LL. Capit. I, pp. 24~26; MG. LL. Conc. I, pp. 1~4; cf. Hefélé-Leclercq, H. C. III, p. 818ff.) 'カロロンヌ'は十四四年三月一日にロンヌで開き、續々開き (MG. LL. Capit. I, pp. 28~30)° 同地をカロロン

ヌともい一度會議を開いてゐる。十四五年三月には恐らく Leptines で全ガリアの會議が開かれた事 (MG. LL. Capit. I, pp. 26~28)°

(8) 十四六年、Metropolitani の権力について教皇に相談して事 (codex carolinus 3—MG. Ep. III, pp. 479~487. cf. Hauck, Kirchengeschichte Deutschlands, 1950, I, p. 570, 578, II, p. 8ff.

(9) ut consulerent pontificem de causa regum, qui illo tempore fuerunt in Francia, qui nomen tantum regis, sed nullam potestatem regiam habuerunt—Einhardi Annales a. 749 (MG. SS. I, p. 137) 各君主の文配者が別々であつて統治してゐるのは自分であると言へるのはカロヌスのみならず教皇も同様で、東方勢力はそのころ何のたよりにもならなかつた (G. L. Burr. The Carolingian Revolution, and Frankish intervention in Italy—Cam. Med. His. II, p. 577).

(10) melius esset illum regem vocari qui potestatem haberet, quam illum, qui sine regali potestate manebat—Annales Laurissenses a. 749 (MG. SS. I, p. 136).

(11) ut non conturbaretur ordo per auctoritatem apostolicam iussit Pippinum regem fieri—Ib.

(12) secundum morem Francorum electus—Ann. Laur. a. 750 (MG. SS. I, p. 138), more Francorum elevatus—

Ann. Ein. a. 750 (MG. SS. I, p. 139).

(31) Pfister & Ganshof, Le regne de Pépin le Bref—Glutz, His. du Moyen Age, I, p. 407.

(14) M. Bloch, Les rois thaumaturges, 1924, pp. 68~69, 461.

(15) この *gyratio* と云ふ式は普通三度くりかえされて後、王たるものは槍を手にして、王権のしるしたる絹もしくは麻の冠帯をつけたものである。

(9) L.-M. Hartmann (Italy under the Lombards—Cam, Med. His. II, p. 207) はロンバルド人が少数民族であつたことから混血による効果を意識して述べたと述べている。同じ著者の *Geschichte Italiens im Mittelalter* は今世紀初頭を飾つた名著であるが、著者の死によつて十世紀までの叙述は、かなづか、II, II, p. 176ff. はロンバルド人の変遷を物語つてゐる。

(17) 書簡も残存してゐる (Vita Stephani II, 15—Lib. Pont. I, p. 444).

(8) Codex carolinus 4, 5—MG. Ep. III, p. 487~488.

(9) *ex militiae optimatibus*—Vita Stephani II, 19 (Lib. Pont. I, p. 445).

(20) L. Duchesne, Les premiers temps de l'état pontifical, 1911, p. 55.

(12) Vita Stephani II, 24—Lib. Pont. I, p. 447.

キリスト教世界の成立について

(23) Vita Stephani II, 26—Lib. Pont. I, p. 447 この時

王子(後のシャルマン)が約一〇〇哩も迎へに出、ピピヌも家族とともに三哩も教皇を出迎え、教皇の姿を見ると馬を下り、ひれ伏してから立上つて手綱をとり、教皇の馬とならんで暫く歩いたと言ふ。翌日から開始された交渉で教皇が切望してゐることは聖ペテロとローマ人の国の権利を保護し、アイストルフスの強請と脅迫を終結させることであつた。ピピヌはアイストルフスに「ラヴェンナ総督領とローマ人の領地や諸権利を返還せよ」(*exarchatum Ravennae et reipublicae iura seu loca reddere*) 約束してゐる (Lib. Pont. I, p. 448)。この会談について Oelsner, Bayet, Hubert の論考を、古くから多数の研究が出ているが、要点は Hefele-Leclercq, H. C. III, pp. 922~923 にまとめられてゐる。

(23) ともかくこれから総督もローマ公末期には同一人の称号—も存在しなくなる。

(24) Einhardus, Vita Karoli Imperatoris, VI (MG. SS. II, pp. 445~446); Vita Hadriani, 41~42 (Lib. Pont. I, p. 498); Codex carolinus, 6~7 (MG. Ep. III, pp. 488~493); cf. Hauck, op. cit. II, pp. 23~24.

(25) これはカカロマンヌの子に対する配属であつたと語られてゐる。Vita Stephani II, 27~28 (Lib. Pont. I, p. 448) はこの動きを年の初めにさしてゐる。De unctione Pipini Regis nota monachi S. Dionysii (MG. SS. XV, p. 3).

シア人の *schola Graecorum* もあった。また何の防壁もない聖ペテロを守る外人部隊 (*Saxoni, Frisones, Franci, Lombardi*) の *scholae* もあり、大本宮は *Palatino* 丘にあった (*Lib. Pont. II, p. 36, n. 27; p. 386, n. 1*)。dux, cartularius, comes, tribunus などが入りこみ、その下に *patroni scholarum, primicerii* (記録係の長官) 所謂第一書記からやがて裁判長になるもの — *L. Halphen, op. cit. pp. 40, 42~52, 85*), *domestici, optiones* などがある。教皇ステファヌ二世の時からローマ公は居らず、それまでになら *Patricius Romanorum* の名がフランク王に与えられていた。統治の責任は教皇がとり、民兵も教皇の命令によりて行動することになる。この *Ecclesia Dei* の元首は *Respublica Romanorum* の元首でもある。

- (42) ローマの秩序再建に諸司教の派遣をどうつづける — *Jaffé, op. cit. I, 2376* の時の書簡は残存せず、内容も *Vita Stephani III, 17* (*Lib. Pont. I, p. 473*).
- (43) *Vita Stephani III, 17* (*Lib. Pont. I, pp. 473~474*).
- (44) 昔 *Nomentum* 司教でもあった人で、「全ガリア教区の大司教」 (*archiepiscopus provinciae Galliarum*) といわれる。
- (45) *Vita Stephani III, 17~18* (*Lib. Pont. I, pp. 474~5*); *Mansi, Concilia, col. 713~721; Hefele-Leclercq, H. C. III, pp. 730~737*.

キリスト教世界の成立について

- (46) *Vita Stephani III, 19* (*Lib. Pont. I, p. 475*) の時 *Constantinus II* の管掌に関する文書は一切焼却されたと言ふから、この事件についての史料は湮滅したわけで、教皇をはじめその場に居合せた凡このものが地にひれ伏して *Kyrieleison* を唱へ、*Constantinus II* の手から *Communio* を受けた罪を告白したと述べている (*Vita Stephani III, 20—Lib. Pont. I, pp. 475~476*)。Constantinus II は痛悔の中に余生を送るべきことが決議された (*Lib. Pont. I, p. 483, n. 50*).
- (47) *Lib. Pont. I, p. 483 n. 52*.
- (48) *Codex carolinus, 45* (*MG. Ep. III, pp. 560~563*).
- (49) *Annales Mosellani a. 770* (*MG. SS. XVI, p. 496*); *Codex carolinus, 44, 46, 48* (*MG. Ep. III, pp. 558~560, 564~565, 566~567*); *L.-M. Hartmann, op. cit. II, II, pp. 251~253*.

- (50) *Jaffé, op. cit. I, 2386; Vita Stephani III, 28~33* (*Lib. Pont. I, pp. 478~480; 484, n. 58*); *Codex carolinus, 48* (*MG. Ep. III, pp. 566~567*). *L.-M. Hartmann, op. cit. II, II, pp. 253~257*; *Hauck, op. cit. II, pp. 80~82*; *L. Duchesne, op. cit. pp. 128~131*.
- (51) *Vita Hadriani, 16~23* (*Lib. Pont. I, pp. 491~493*).
- (52) *Ann. Lauris. a. 773, Ann. Einh. a. 773* (*MG. SS. I, pp. 150~151*).
- (53) *Vita Hadriani, 24~25* (*Lib. Pont. I, pp. 493~494*);

- L. Duchesne, op. cit. pp. 134~143; L.-M. Hartmann, op. cit. II, II, pp. 257~267; Hauck, op. cit. II, pp. 72, 83~84.
- (54) Vita Hadriani, 26~28 (Lib. Pont. I, p. 494).
- (55) Col de Grand St-Bernard 及 Mont-Cenis を超えたのである。ヤッロナにはカルロマンヌスの遺児もいた (L.-M. Hartmann, op. cit. II, II, pp. 265~270).
- (56) Vita Hadriani, 35 (Lib. Pont. I, p. 496).
- (57) 皇帝の場合には六六三年教皇ウィタリアヌスがローマの北六哩まで出てコンスタンヌス二世を迎えた例があり、もつと盛大であつたらしい。この度の歓迎はフランク王に対して特別に試みたものではなかつた。事実上、教皇としては前のロンベアルド王の例もあり、かなり警戒してゐたのではなかつたやうである。
- (58) L.-M. Hartmann, op. cit. II, II, p. 269; Hauck, op. cit. II, pp. 84~86.
- (59) Vita Hadriani, 41~42 (Lib. Pont. I, p. 498).
- (60) a Lunis cum insula Corsica, deinde in Suriano, deinde in monte Bardone, id est in Verceto, deinde in Parma, deinde in Regio; et exinde in Mantua atque Monte Silicis, simulque et universum exarchatum Ravennantium, sicut antiquitus erat, atque provincias Venetiarum et Istria, necnon et cunctum ducatum Spoletinum seu Beneventanum—Vita Hadriani, 42 (Lib. Pont. I, p. 498).
- (61) この中には東方帝国に所属する飛地 (Gaeta, Napoli, Amalfi, Calabria 南端及 Puglia) を含み、Sicilia 及 Sardinia も加へてゐる。
- (62) Jaffé, op. cit. I, 2408, 2414, 2416; L. Duchesne, op. cit. pp. 155~156.
- (63) Jaffé, op. cit. I, 2338, 2358, 2408, 2467; L. Duchesne, op. cit. pp. 149~154; donatio Pippini を確かにイタリアの中心をラヴェンナからローマに移すものであつたから、ラヴェンナの人々が iugum Romanorum servitutis (ローマ従属の轡) を嫌つてゐたことも事實である。
- (64) Jaffé, op. cit. I, 2415, 2418, 2419, 2420; Codex carolinus, 52, 54, 56, 57 (MG. Ep. III, pp. 573~574, 576~577, 580~583).
- (65) Ann. Lauris. a. 778; Ann. Einh. a. 778 (MG. SS. I, pp. 158~159).
- (66) Jaffé, op. cit. I, 2423, 2424; Codex carolinus, 60~61 (MG. Ep. III, pp. 585~589).
- (67) Codex carolinus, 62~64 (MG. Ep. III, pp. 589~592).
- (68) Codex carolinus, 65 (MG. Ep. III, pp. 592~593).
- (69) Ann. Lauris. a. 781; Ann. Einh. a. 781 (MG. SS. I, pp. 160~161).
- (70) Theophanes, Chronographia a. 6274-PG. CVIII; Ann.

Mosellani, a. 781 (MG. SS. XVI, p. 497); Ann. Laureshamensis a. 781 (MG. SS. I, p. 31). L.-M. Hartmann, op. cit. II, II, p. 291~292.

- (71) Jaffé, op. cit. I, 2433, 2434, 2436, 2440; Codex carolinus, 69~72 (MG. Ep. III, p. 598~603)。この事件はハルムと二年を通じて規正された(ハルム十年の Pactum Hludovici Pii cum Paschali Pontifice—MG. LL. II, I, p. 352~5)。この決定によつて教皇領はティエール中流域を越えて、まだ新しい領地に入つていない Rieti の方までのびた様である。またスボレト公領は少し切りとられた。しかしこんなことでは七十三と四年冬にローマで抱かれた大きな希望からは距離があり、少くとも七十四年の donatio の大きな見通しとはくらべものにならない。奇妙なことに七八一年シャルマンがローマを訪れたから、教皇ハドリアヌスのフランク王への書簡は、これまでの書簡を暗くしていた度重なる要求を繰返さなくなる。教皇はこの新しい事態即ちイタリア王としてのフランク勢力の前に一つの諦観をもつた様で、これからの教皇領と言うものは小国家であるし、小国であらねばならない、と言つことになる。この点で七八一年は教皇領史の重大な時期とも言つべきであらう。
- (72) Capitulatio de partibus Saxoniae (MG. LL. II, I, pp. 68~70) はその精神を十分に伝えている。
- (73) Jaffé, op. cit. I, 2451; Codex carolinus, 76 (MG. Ep. III, pp. 607~608).

キリスト教世界の成立について

- (74) Jaffé, op. cit. I, 2450; Codex carolinus, 78 (MG. Ep. III, pp. 609~610).
- (75) Jaffé, op. cit. I, 2439; Codex carolinus, 74 (MG. Ep. III, pp. 604~605).
- (76) Ann. Lauris. a. 787; Ann. Einh. a. 787 (MG. SS. I, pp. 168, 170~172).
- (77) Pfister & Ganshof, Le règne de Charlemagne jusqu'au rétablissement de l'Empire en Occident—Glottz, His. du Moyen Age, I, p. 425; L.-M. Hartmann op. cit. II, II, pp. 289~293.
- (78) Pfister & Ganshof, op. cit. p. 428; Hauck, op. cit. II, pp. 90~95; L. Halphen, op. cit. pp. 17~18, 34~35.
- (79) Jaffé, op. cit. I, 2467, 2478.
- (80) Jaffé, op. cit. I, 2413, 2442, 2478.
- (81) Rogavitque ut aliquem de suis optimatibus Romanum mitteret, qui populum Romanum ad suam fidem atque subjectionem per sacramenta firmaret—Ann. Einh. a. 796 (MG. SS. I, p. 183).
- (82) 或は capitulare missorum (MG. LL. II, I, p. 66) に同じ精神かも知れない—L. Duchesne, op. cit. pp. 166~168.
- (83) Vita Leonis III, 10 (Lib. Pont. II, pp. 3~4).
- (84) Alcuinus, Epistolae 159 (MG. Ep. IV, p. 258).
- (85) Jaffé, op. cit. I, 2424 及び 2425 ペスカルスは七十八年から

- の primicerius であつた。七九八年四月二十日の教皇書簡 (Jaffé, op. cit. I, 2498) でも primicerius である (Lib. Pont. II, p. 36 n. 18)。同じ Ann. Einh. a. 801 (MG. SS. I, p. 189) でも nomenclator である。L. Halphen (Etudes sur l'administration de Rome du Moyer Age, 1907, p. 93) でもその語を論じている。カンペンズ sacellarius (Vita Leonis III, 11—Lib. Pont. II, pp. 4, 36, n. 18) でもこの人は八〇一年シャルマンによつて処罰された (Ann. Einh. a. 801—MG. SS. I, p. 189)。
- (87) visum recepit et lingua ad loquendum illi restituta est—Vita Leonis III, 13 (Lib. Pont. II, p. 5)。
- (88) この時の会談の内容は余りよく分らないが Gesta episcoporum Neapolitanorum, XLVIII (MG. SS. rer. Lang. p. 428) の著者は教皇がローマに復帰した時にはシャルマンに帝冠を与へる約束をしたものとしてゐる。
- (89) Vita Leonis III, 19, Qui Romani—Lib. Pont. II, p. 6。
- (90) Vita Leonis III, 17 (Lib. Pont. II, p. 6)。
- (91) Alcuinus, Epistolae, 174 (MG. Ep. IV, pp. 287—289)。
- (92) Alcuinus, Epistolae, 179 (MG. Ep. IV, pp. 296—297)。
- (93) apostolicam sedem iudicariam esse, non iudicandam—Alcuinus, Epistolae, 179 (MG. Ep. IV, p. 297)。
- (94) Alcuinus, Epistolae, 184 (MG. Ep. IV, pp. 308—310)。
- (95) Einhardus, Vita Karoli Imperatoris, 17 (MG. SS. II, p. 452)。
- (96) Vita Leonis III, 21 (Lib. Pont. II, p. 7); Ann. Lauris. a. 800; Ann. Einh. a. 800 (MG. SS. I, pp. 188—189)。
- (97) Vita Leonis III, 21 (Lib. Pont. II, p. 7)。
- (98) このあたりの史料解釈は L. Duchesne (op. cit. p. 176) など全くシャルマンの意思が圧倒的であつたと見ている。
- (99) これは一代おいて後の教皇パスカリス一世 (八一七—八二四) がルイ敬虔王のために同じことをさせられて居り、九世紀を通じて立派に前例が作られたこととなる。
- (100) Vita Leonis III, 23 (Lib. Pont. II, p. 7); Ann. Lauris. a. 801; Ann. Einh. a. 801 (MG. SS. I, pp. 188—189) この時、おこなわれた儀式はたしかにコンスタンティノポリスで三〇〇年以上も行われていたものから暗示をうけているのである。即ち四五七年はじめて総大司教アナトリオスがレオ皇帝 (四五七—四七四) に用いてから幾度かくりかえされたものである (Theodorus lector, H. E. II, 65—PG. LXXXVI)。
- その中には総大司教が君主のために唱える祈禱、戴冠、執行者による新帝の adoratio が含まれていた。九世紀の人である Theophanes (chronographia a. 6289—PG. CVIII) でもその時、教皇はシャルマンに予め全身に香油をぬいたと言つてゐるが、西方の史家は何も語っていない。ただ戴冠式後 Vita Leonis III, 24 (Lib. Pont. II, p. 7) によると教皇は王の長

子カロルスに香油をぬっているから、これを父とまちがえたのであらう。

- (98) E. Amann (*L'époque carolingienne*, 1947—*Hist. de l'église VI*, p. 162) は十二月二十三日の会議がこの重大事以外に何を語り合うことがあつたかと疑問を述べている。更に Amann はこの重大事の提議が教皇によつてか、王によつてか、何れがイニシアティブをとつたか、だけが問題であらうと述べ、それは現地にもいなかった Alcuinus をも含めて当時一流の顧問をもつ王の側から出たにちがいない、シャルルマンはその様な重大な動きを外部から来るにまかせておく様な人ではなかつたし、一年半も苦境に追いまわされていた教皇がその様な計画を立てられる筈がない、と興味ある推定を下している。しかしこれはあくまで推定であつて、見方を変えれば、その様な羽目にあつた教皇だからこそ積極的な自分の謝意を表明する機会を求めたし、シャルルマンが黙認する限り、周囲は一切が当り前のこととして進行し、遠い東方帝国の思惑など問題にする必要はないと考えさせたかもしれないのである。

- (101) エインハルドスの伝えるシャルルマンの不満と言うものは本物が見せかけか、少くともテキストに関する限りは後からの話であり、東方との関係がこじれてくると、何と言つてもその原因である戴冠式についての無責任な、気まぐれな、言いわけとして出た言葉であつたのかもしれない。ともかく、この言葉が王のものであつたとしても、当時の王の行動とは全く遊離し

キリスト教世界の成立について

たものでしかないのは Halphen の研究以来、万人の認めるところである。要するにエインハルドスの *Vita Karoli Imperatoris*, 28 (MG. SS. II, p. 458) の記事はまだ十分に後世の史家によつて解釈されているとは言ひ難く、文献史料に関する限り解き難き謎であることは Th. Hodgkin (*Charles the Great*, 1897, pp. 201~202), H. W. C. Davis (*Charlemagne*, 1900, pp. 167~188) 以来かわりはない。

- (102) Einhardus, *Vita Karoli Imperatoris*, 16 (MG. SS. II, pp. 451~452).

- (103) *Annales Laureshamenses*, a. 801 (MG. SS. I, p. 38) この女帝は東方に流行していた聖画像破壊の動きに反対の立場をとつていた人であるが、策略によつて自分の子であるコンスタンティヌス六世をとらえ、盲目にさせて自分が帝位についたほどの野心家であつた。この女帝との婚約こそシャルルマンの夢みた方法であつたかもしれぬと L. Duchesne (op. cit. p. 177) は想像している。何れにせよシャルルマンの使節は八〇二年初にコンスタンティノポリスに到着していたから、八〇二年十月三十一日に起つた革命で女帝が失脚し、Nicephorus が新帝になる悲劇を見聞したらしく (Theophanes, *Chronographia* a. 6295—PG. CVIII; Ann. Einh. a. 803—MG. SS. I, p. 191).

- (104) シャールマンが東方帝国に対する配慮から他の機会を希望したと解釈する史家は多い (Pfister & Ganshof, *Le rétablis-*

sement de l'empire en Occident—Hist. du Moen Age, I, p. 456 n. 6).

(91) 専らこの矛盾からカロリング朝の史的性格を追求した研究として有名な H. Fichtenau, *Das Karolingische Imperium*, 1949 がある。P. Munz はその英訳 (1957) は原書の前半 (原文 p. 194 まで) にのみ力点をおいて、第六章から以後の四章は削除し、焦点をぼかした憾がある。

(92) L. Halphen (*Charlemagne et l'empire carolingien*, 1949, p. 130) は *Annales Einhardi* a. 801 (MG. SS. I, p. 189) を「patricius の称号をめぐり皇帝と呼ばれることになった」(omisso Patricii nomine, Imperator et Augustus appellatus) として述べた。

(93) Einhardus, *Vita Karoli Imperatoris*, 27 (MG. SS. II, p. 457) 皇帝はもともと素朴に国家と教会を同一化し、神から俗事の管理を委ねられたものとして教会を保護し、信徒を守らねばならぬと言ったことを自分勝手に思い込んでいた様である。少くともこうした新しいキリスト教帝国の思想は Waitz (*Deutsche Verfassungsgesch.* III, pp. 201~203), Doellinger (*Das Kaiserthum Karls d. Gr.* pp. 337, 351), Gregorovius (*Gesch. der Stadt Rom* II, pp. 497~498), Giesebrecht (*Gesch. d. deutsch. Kaiserzeit*, I, I, pp. 123~124) 以来、シャルルマンについて一般化されているが、問題はシャルルマンの国家と教会を混同した思想が、如何なる

点で成功し、また破綻を見せつつあるか、である。

(94) Alcuinus, *Epistolae*, 171, 174 (MG. Ep. IV, pp. 281~283, 287~289).

(95) Pfister & Ganshof, op. cit. I, p. 457; J. Calmette, *Charlemagne, sa vie et son oeuvre*, 1945, pp. 124~125.

(96) このサイトは今日ある日の姿をこの後々の出来の重要な資料である。H. W. C. Davis, *Charlemagne*, 1900 年頭についての写真のやつである。